

今年のプロ野球は、日本シリーズを4勝3敗で制した楽天が、初の日本一に輝きました。日本シリーズは短期決戦で注目度が高いので、N I Eの一環として、授業などで扱うとよいでしょう。たとえば、事前にどちらが何勝何敗で勝つか、その根拠を書くことに重きを置いて予想させます。今年はほとんどの野球評論家や担当記者が、巨人有利と予想していたようですか……。

さて、楽天の3勝2敗で迎えた第6戦（11月2日）の結果を伝えた翌日の新聞報道から二つのことを考えてみます。

一つは、見出しです。王手をかけられていた巨人が、この第6戦に勝利したということで、スポーツ紙を中心に「日本シリーズ逆王手」「原巨人逆王手」「巨人覚醒の逆王手」など、「逆王手」という言葉を使った大きな見出しが紙面を飾りました。私は、この「逆王手」という言葉に違和感を持ちました。

「王手」とは、「将棋で、直接に王将を攻めたてる手」のことで、転じて「最終的な勝利を得るまであと一歩のところ」という意味です。スポーツなどでよく使われますが、上記の「逆王手」という見出しでは、巨人が逆に王手をかけた——つまり、巨人が有利になったというイメージを持ちます。楽天のエース・田中将大投手を打ち込んで勝った巨人が逆に有利になったという読みを込めてのことかも知れませんが、厳密に言うなら楽天の王手は変わらないわけですから、「逆襲巨人、タイに」とか「巨人も王手」なら分かります。

もう一つは、その田中投手の連勝がストップしたという記事の扱いです。この試合の敗戦投手となり、今年、負けなしで続けていた連勝が26でストップしたと、朝日新聞をはじめ全国紙が第1面で大きく報じました。シーズンの登板を24連勝で終えた時（10月9日朝刊）には、そこまで大きな扱いではなかったのになぜか、考えさせるとよいでしょう。シーズンは終わっても、連勝はまだどこまで続くか分からないが、負けたことで連勝数が確定したから——なども考えられるのではないのでしょうか。

（鈴木伸男 全新聞教育研究協議会顧問）